

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	看護の未来を拓く看護研究
作成者（著者）	高橋, 良幸
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2023.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 6. p.1 1.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD28215522

看護の未来を拓く看護研究

学校法人東邦大学健康科学部
FD委員会 委員長 高橋 良幸

この健康科学ジャーナルは第6巻より東邦大学健康科学部のFD委員会の中で編集されることになりました。第6巻の発刊に添えて2022年度FD委員長を務めた私からご挨拶申し上げます。

昨年、とある大学院の授業で、看護系の大学院生たちに「新型コロナウイルス感染症の流行によって看護研究はどのように変わるか」というテーマで互いにインタビューをしてもらったことがあります。私自身その当時は大学教員の職を離れておりましたが、パンデミックによって世界の公衆衛生上の危機を打開するために、至る所でデータが集められ、共有され、分析結果を公開するという動きが生まれていました。今後このような研究と実践の循環は益々加速するだろうと期待され、若い人たちはどう考えるのだろうと興味を持ったのがきっかけです。大学院生たちは、やはりデータサイエンスの重要性を認識しており、臨床看護の中でもデータサイエンスが活用・浸透されることや、人と人の距離を問わないオンラインの臨床活用について意見が寄せられておりました。未来は明るいと思いました。

一方、日本の看護系大学の教員を対象にした2021年の調査（Yoshinaga,2021,JJNS）では、パンデミックによって看護教員の7割が研究活動全般に費やす時間や、学会やイベントへの参加、実験や調査をする時間が短くなり、「教える」ことに8割の教員が増えたと答えております。この研究時間の減少は、特に私立大学の教授、准教授、講師で、科学研究費補助金を受けている者で有意であったということでした。このことは日本全体の看護研究の停滞を意味しておりますが、先ほどの大学院生の発想を借りると、時間が制約される中でも工夫一つで、今まで通り、いや、それ以上に効率的に研究活動を実施できるということではないでしょうか。現在、海外では臨床の中にResearch Nurseが雇用され大学教員と提携し、研究を絶えず行っていく形態が成果をあげていっております。自分たちの研究スタイルも見直す時期にきているのかもしれない。

以上のような研究継続の困難な時期に、第6巻には総説3件、原著論文3件、報告3件と盛況なご投稿をいただきました。本誌に寄せられた論文から研究熱が上昇し、活発な議論が生じることを期待しております。引き続きこの健康科学ジャーナルを研究知見の公表の場としてご活用いただけましたら幸いです。